Title	「霊性の教育」と全学礼拝 ：20 周年を迎える聖学院大学
Author(s)	大高，研道
Citation	キリスト教と諸学 ： 論集, Volume24, 2009.3：136-146
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3253
Rights	

SERVE

聖学院学術情報発信システム ： SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

「霊性の教育」と全学礼拝

――二〇周年を迎える聖学院大学――

大高研道

一、礼拝を守り続けた四〇年を顧みて

おはようございます。コミュニティ政策学科の大高です。本日は、長らく聖学院を支えてこられた諸先輩方とともに全学礼拝懇談会でのお話の機会を与えられたことを非常に光栄に思っています。同時に、今回のテーマは「全学礼拝を守り続けた四〇年を顧みて――二〇周年を迎える聖学院大学――」ということですので、着任してまだ日が浅い私で本当にいいのかな、という気持ちでこの場に立っています。

二〇年前と言いますと私は大学一年生でした。ですから、先ほどお話をされた黒木章先生がこの地で教壇に立たれていた時に、その講義を聞いていた学生と同年代ということになります。その頃は今思い出しても、とにかく楽しい毎日でした。どちらかと言うと厳格な無教会主義クリスチャンの家庭に育ち、その反動というわけではないのですが、親元を離れた大学時代は、やはりどこか解放された気分になったのを覚えています。実家では、日曜日に聖書集会をやっておりますが、大学時代に礼拝や聖書集会に参加することはほとんどありませんでした。ですから、

この頃は私にとって一番キリスト教から離れていた時期、神様から選ばれなかった時期ということになるのかもしれません。

さらに四〇年前となると、私はまだ生まれておりません。ですから、先ほどのお二人の先生方のお話は、全学礼拝を大学生活の中核に据え、大切に守ってきた聖学院の歴史に思いを馳せつつ、自分のこれまでの歩みと重ね合わせながら聞かせていただきました。私は現在三八歳ですが、この年月を振り返ってみても色々なことがありました。多くを経験し、そして悩んだ時期でした。その間に、この地で礼拝が粛々と行われていたという事実に思いをめぐらせますと、あらためて深い感銘を覚えます。

今回は聖学院大学における礼拝の歩みという観点から二〇年、四〇年を顧みることはできませんが、これまで自分が歩んできた道と重ね合わせながら、礼拝について考え、感じていることについてお話しさせていただくことで与えられた課題にこたえたいと思います。

二、霊をもって交わる

「礼拝」について考える際に、まず頭に浮かぶ聖句は「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまことをもって礼拝すべきである」（ヨハネ四・二四）です。

「神は霊である。神は物でない。ゆえに偶像をもって表わすべきものでない。神はまた思想でない。理想でない。概念でない。ゆえに哲学的術語をもっていい表わし得べきものでない。（中略）神は霊である。ゆえにこれを拝す

るものは霊をもってすべきである。（中略）人はまたその霊においてのみ直接に神と交わることのできるものである」（『内村鑑三聖書注解全集第一〇巻』教文館、一九六〇年、一三六頁）。

神様はモノではないので偶像をもって表わすべきではない。概念でもないので理屈で説明しうるものでもない。神様は霊であるから私たちも霊をもってのみ交わることができる。これが、礼拝に臨む際に私が心がけている唯一のことです。奨励の前には、いつも沢山のことを考え準備します。そして、含蓄のある言葉を発しようと力んでしまいがちです。対人的な証の先には、神様との直接的な交わりの場が開かれていることを忘れてしまうことも度々です。理論武装した時こそ「霊をもって交わる」自分を見失わないように自戒しています。ただし、実際には、そのことを意識すると言っても、自分でコントロールできるものではないので感覚的な表現になってしまいますが、内容を正確に誤解されることなく説明することに心を砕くのは準備の段階で終わりにし、その場に立った瞬間は、心を開放させるようにしています。私は奨励とは神様を感じながら証をすることだと考えていますし、それは全学礼拝での奨励に限らず、礼拝に参加する際に常に心がけていることでもあります。

以下では、このような私の礼拝に対する思いについて若干ふれさせていただいた上で、大学礼拝という観点から、その充実の方途についてお話しさせていただきたいと思います。

三、私にとっての礼拝

私は礼拝での奨励が苦手です。その場で感じる緊張は、講義の時のそれとは異質のものです。この緊張を生み出

す要因のひとつに、キリスト教神学の存在があります。もちろん、学問、すなわち学がある（知っている）ということが必ずしも信仰を意味するものではないことは理解しているつもりなのですが、やはり専門家が多数おられるこの場に立つと、聖句を選ぶ際に委縮してしまう自分がいることは否定できません。もう一つは、自分の内面を見られることからくる緊張です。科学的思考にもとづいて組み立てられる講義とは違い、信仰によって神の言葉を伝える奨励において、求められるのはありのままの自分です。結果として、学生や教職員の皆さんには多少なりとも「普段」とは違う自分を見せることになります。このことも気恥ずかしいことではありますが、それ以上に私が強く感じるのは、飾った言葉や心の伴わない知識を披露しようとした時に鋭いまなざしで見つめてくる神の義です。不誠実の一点でも持ち込んでしまった時に感じる、全てを見透かされているような恐さと表現した方がよいかもしれません。

皆さんは、チャペルに足を踏み入れる時、最初に何を感じられるでしょうか。開放感や安らぎを感じられる方も多いと思います。しかし、私の場合、真っ先に襲ってくる感覚は「畏れ」です。このような表現は不適切かもしれませんが、とにかく自分の心の奥底まで見透かされているようで恐いのです。常に見られている、「神の前」に立っていることを強く意識させられる空間がチャペルであり、礼拝の場です。ですから、どちらかというと厳しい目で見つめられているという意識が強く働きます。

山形県小国町に基督教独立学園という高校があります。弟がそこで学び、私も一時期進学を考えたことがあるのですが、その校舎に「神を畏るるは学問の始め」という言葉が記されています。箴言にある「主を恐れることは知識のはじめである」（箴言一・七）、「主を恐れることは知恵のもとである」（箴言九・一〇）をもとにしていると考えられますが、科学万能主義が幅を利かせる時代にあって、生命さえもコントロールできるかのように振舞いがちな

私たちにとって、この神への畏敬の念に基づいた学問への姿勢は、今、あらためて見直されているように思います。それは、本学の標語である"pietas et scientia"（敬虔と学問）に通ずる思想でもあります。

同時に、この校舎の言葉を初めて見た時、常に何かに対する罪悪感（畏れ）とともに生きてきた「気の弱い」自分を肯定的に捉えることができたことを思い出します。私はいつも怒れる神をどこかで感じながら生きてきたような気がします。そして、礼拝は、そのことを強く意識させられる場なのです。

四、チャペルの天は開かれている

礼拝は同時に、心を静め自分を見つめ直す厳粛な時間でもあります。神との直接的な対話の空間もその場に開かれています。今年度最後の礼拝において阿久戸学長は「チャペルの天は開かれている」というお話をされました。阿久戸先生の伝えたかった意図とは異なるかもしれませんが、私はその時に、「チャペルの門戸が開かれている」という言葉ではなくて、「チャペルの天が開かれている」という言葉を使われたことに大きな意味を感じ、自分なりに納得して聞いていました。「教会は誰にでも開かれているんだよ」というメッセージも含まれているとは思うのですが、それがもし「門戸は開かれている」ということであれば、対人間的な関係に止まってしまうような気がするのです。神様との直接的な関係を結ぶ場であるということ、そしてそこには希望と未来が開かれているということを、「天が開かれている」という言葉で表現されたのだと受け止めました。礼拝とは、そのような場、すなわち怒れる神を感じるのも、自分を戒めるのも、そこに安らぎを感じるのも、神様との直接的関係において開かれている空間なのだと思います。

五、愛されることを求める若者

次に、そこに参加する学生にとっての礼拝の位置について考えてみたいと思います。私は現在、文科省の科研費をいくつか頂いておりまして、そのうちのひとつに若者の自立支援にかかわる研究調査があります。先日も滋賀県が実施している非行少年の自立支援プロジェクト等を見てきたのですが、非行少年や引きこもりの少年に限らず、問題を抱えていないように見える「普通」の若者でさえ、つながることに苦労していることに気付かされます。そして、この事と無関係ではないと思うのですが、もう一つは自分の存在意義をなかなか実感できない社会にあって、「愛される」ことを強く求める若者が多いように感じています。

昨年度の全学礼拝懇談会の際に、金子晴勇先生が学生の宗教意識の希薄化について触れられました。その指摘に深くうなずきつつも、私は同時に、なぜ学生がこんなにも霊的なもの、スピリチュアルなものに走るのだろうかと考えていました。今の若者は非常に絶対的なものを求める傾向にあります。カリスマティックなものに惹かれ走るという行為はその一例なのでしょうが、それは裏を返せば誰かに強く愛されたいという想いの表れと見ることができます。

「愛されている」という言葉が、安易で気休め的な使用に終始することに注意を喚起されたのが、同じく昨年の全学礼拝懇談会での菊地順先生のお話だったと思います。私も「愛されている」という言葉の世俗的な使用には違和感を覚えるものの一人です。そのような思いは反抗期に芽生え、五年間の北アイルランド留学時代にも感じたことがありました。その安易な言葉の使用を慎むと同時に、最近は、にもかかわらず、やはりキリスト教の愛の本質

は「愛する」ではなく「愛されている」／「愛されている実感」なのだと考えるようになりました。「愛している」から「愛されている」という実感への転換こそが、キリスト教的な愛の本質ではないかと思うようになりました。礼拝を通して、愛されていることを実感する。そのような実感こそが、本当に強い、流されない人格を形成するのではないでしょうか。そのためにどのような働きができるのかを考えることこそ、我々に課せられた大きな使命であるように思います。

ちょうど一月の礼拝は、このような学生の悩みに寄り添う奨励が多かったと記憶しています。たとえば、自分は本当に必要とされているのかと悩んでいる若者に対して提示された、主があなたを必要としているのだという言葉は、まさにそのような若者に対するメッセージとしてとても重要であったと感じましたし（「主がお入り用なのです」（マルコ一一・三、濱野先生）、あるいは、存在の絶対基準を持たない現代人に対して、「する」／「した」ということではなくて、「いる」ということに意味があるのだと説かれた志田先生の奨励は非常に心に響くお話でした（マタイ六・二六―三〇）。それらは、「あなたがたがわたしを選んだのではない、わたしがあなた方を選んだのだ」（ヨハネ一五・一六）という聖句の意味を改めて考えさせてくれるものでした。

六、学生にとっての礼拝

では、学生は礼拝をどのようにみているのでしょうか。先週行われた冬のリトリートでは、学生と礼拝について語り合うグループ懇談の機会を得ました。その中で、参加する理由として一番多く指摘されたのが「レポートのため」でした。この点に関しては、これまでもいろいろと議論されているようですし、後ほどの懇談会でも意見交換

ができればと考えていますが、その他に「説教・奨励を聞くため」、「奉仕、それを通した友人との交流」、「歌・ハンドベルクワイア」、「講義の空き時間の調整」などがあげられました。これらが具体的にどのような意味を持つかは別としても、このような動機で参加する学生の実態に即して、どのように礼拝を充実させていくのかという議論は必要だと思います。

もう少し具体的に、学生が礼拝をどのようにみているのかを聞いてみますと、「礼拝は心を合わせる空間」、「心を養う場」、「自分を見つめ直す場」、「多様な見方や考え方を学べる」、「特にノンクリスチャンの一年生には御言葉を聞くよい機会」など、非常に肯定的な意見を聞くことができました。リトリートにはクリスチャン学生の参加が多いですが、彼ら彼女らは、ノンクリスチャンの学生にとってもこのような機会があることはよいことだと考えているようです。その一方で、説教や奨励を聞くためではなく、レポートのために出席する学生が多いことに対する批判も目立ちました。それはレポートを課すこと自体がどうなのかという話にまで発展しましたが、この点に関しては積極面も消極面もあると思いますので、今後とも色々な角度から話し合う必要性を感じています。他に、「マナーが気になる」、「全体的に硬い、形式的過ぎる」、「原理より経験にもとづいた話をして欲しい」といった指摘もありました。

クリスチャン学生の場合ですから、総じて、御言葉を聞いて一日が始められることに意味があると捉えているようです。私がはっとさせられたのは、次の言葉でした。「心からの教会は自分の（通う）教会」。つまり、全学礼拝を各々が通う教会のそれとは異なるものとして位置づけている学生がいることです。ある意味それは当然のことかもしれませんが、では、彼ら彼女らにとっての全学礼拝とはどのようなものなのでしょうか。確かに性格は異にしているとは思いますが、私は先ほど述べたようなものとして礼拝をとらえていますので、その位置と役割について

考えさせられる瞬間でもありました。

七、大学礼拝の充実にむけて

このような学生の声を踏まえつつ、最後に大学礼拝の充実の方途について考えてみたいと思います。ただし、こうあるべきだと提言するのではなく、私自身が奨励に臨む際にいつも考えていることに対して、皆さんのご意見をお聞きしたいという気持ちから三つほど話題提供させていただきます。

一つは、「何を話すか、伝えるか」ということです。二つは、「どのように話すのか」、そして三つは、「どのように学生の参加を促すか」ということです。第一の点に関しては、色々なご意見があるとは思いますが、私が特に気になっているのは、先ほどの黒木先生の「慰めばかりでは…」というお話にも通じることかもしれませんが、「愛」や「保護」だけでいいのか、ということです。つまり、話されるメッセージが神の愛や優しさだけでいいのか。先ほども怒れる神という側面について触れましたが、神への畏れという心的態度の形成のためには神の義を伝えることも必要ではないかと考えています。なお、本学にはノンクリスチャンの学生も多く、関心を持ちつつも足を踏み入れることができない学生もおります。そのことにも配慮した上で、神との直接的な霊的関係の構築、あるいはその手助けをするための伝道のあり方について考えることは、古くて新しい大学礼拝の課題と言えます。

二つ目に関しては、やはりリトリートで、どうも奨励者の話が硬い、形式的で何か直接的に話しかけられている気がしないという指摘がありました。正確に思いを伝えたくて作成した原稿を読む奨励のスタイルにも良さがあると思います。しかし、もしそのことによって聞き手が語りかけられているように感じられないのであれば、反省す

べきメッセージとして、証をする側の心に留めておく必要があります。さらには、その奨励を通して、聞き手のみならず話している本人が神様を感じているかということが問われているのだと思います。原稿を読みながら、どんどん自分の世界に入り込んでしまうのではなく、話が進めば進むほど神様を感じることが出来るところが礼拝の場です。今、私がこの場に立っている時もそうです。この場に立った時には何となく頭の中にあった余計なものが消え、心のままに神様に聞いてもらう、そのような意識に自然になっていくのだろうと思います。

八、多様なチャンネルをつくる

三つ目のどのように学生の参加を促すかという点ですが、これは必ずしもノンクリスチャンの学生だけを念頭においているわけではありません。実は、クリスチャンの学生でも、面識のある先生ならともかく、馴染みのない先生の奨励を聞きに来るということにはならないようです。このことも踏まえた上で、学生が礼拝につながるためには、どのような手助けができるのかという議論は、やはり必要だと思います。とくに、ゼミやキリスト教関連の講義を中心に、大学生活と礼拝をつなぐ多様なチャンネルの構築がこれまで以上に求められています。

私は、もしこのチャンネルが上手く機能していないのであれば、それは第一に教職員間のつながりの弱さに起因するものと考えています。つながりの、あるいは連携の弱さだと思います。教職員が他の教職員について知ること、あるいは素敵だなと思ったことを評価し評価される関係は、これまでもたくさんあったと思いますが、とても大切です。それは、決してイベントや交流会を増やせということではなく、仲間に対して心を砕き、耳を傾け、心にとどめておくという、本当に些細なことから形成されるような気がします。昨年の夏に学生部に依頼されてニュース

レター「かけはし bridge」に小さなエッセーを書いたところ、何人かの職員の方に声をかけていただきました。そのような小さな関係の積み重ねで十分なのだろうと思います。

ある先生は自分の所属学科の先生の奨励はできるだけ聞くようにしていると語っていました。そのようなつながりから形作られる関係性こそ、これまで以上に大事にすべきだと考えます。学生には横のつながりというものは見えませんので、多くの場合、その教員と学生との直接的な関係で終わってしまいます。しかし、横の関係性が見えるようになれば、礼拝も学生の中で一つのつながりとして理解されるようになります。今後、どのような新しいチャンネルが形成されるのかという点については、是非皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

最後になりますが、私は日常的に学生と接する中で、クリスチャンになるか否かということはともかくとして、多くの学生が自分なりの表現で救いを求めるサインを出しているように感じています。ですから、キリスト教主義の大学だからという説明を超えて、私たちが学生たちに礼拝を勧める理由があると考えています。潜在的な学生の求めに応えるためには何が必要か。礼拝とともにある大学生活を学生たちが送るためにはどのような支援が可能か。今後とも「霊性の教育」の充実にむけて、その意味と意義を明確化し実行する働きの端に加えさせていただければ幸いです。

以上でお話を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

（以上、二〇〇八年二月二十一日、「二〇〇七年度全学礼拝懇談会」での講演）